

女性が大活躍する6次化産業で、会社のブランド力がアップ！

株式会社サン・ファーム

※2018年3月現在

代表者名	八幡 みわ	資本金	16 百万円
設立年	1966 年 2 月 28 日	売上高	606 百万円 (2017 年 2 月期)
事業内容	生産 (鶏卵、親鶏、発酵鶏糞)、消費者直売、加工・製造、観光・交流、飲食	経営規模	田 0.3ha、直売所 150 m ² (82 種類)、畜舎 170,000m ² 、採卵鶏 100 千羽
従事者数	49 人 (うち女性 36 人。女性内訳：役員 2 人、管理職 3 人、一般職 12 人、常勤パート 18 人)		
女性活躍支援	[女性に配慮した取組み、実績のある制度・支援] 産前産後休業、育児休業、育児休業代替要員を確保 [女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係 (休憩室・屋内トイレ・シャワー)、重労働等の業務改善、菓子製造部門の省力・機械化		



経営概況

株式会社サン・ファームは、熊本市内から車で1時間ほど。農地と住宅地が広がる、のどかな郊外に本社を構える。自家配合飼料にこだわった採卵鶏の生産をメインに、自社の卵のお菓子などを加工販売する直売交流施設「ひなたまごっこ」や、元養鶏所の跡地を利用したパークゴルフ場、1,000kw規模の太陽光発電所などを展開する複合経営の農業法人だ。

創業は1960年、代表の八幡みわ氏の父・紀雄氏が先代から養鶏所を受け継いで規模を拡大。1999年に紀雄氏が旧城南町の町長に就任したのをきっかけに、みわ氏が夫とともに東京からウタ

ーンして実務を行うことになった。

みわ氏が夫とともに経営に取り組んでからは6次化産業にも力を入れ、2007年にパークゴルフ場の隣に直売所「ひなたまごっこ」がオープン。年間10万人を超える集客力を持ち、熊本の老舗デパートの鶴屋百貨店にも2010年より直営ショップを出店中だ。6次産業化をきっかけに企業のブランド価値が上がり、地元の認知度も広まった。その「ひなたまごっこ」では商品開発から製造、販売、接客まですべて女性スタッフが主力で行い、6次産業化の成功に女性の力が大きく貢献している。

1. 経営者の理念・意識改革

2017年7月に代表に就任したみわ氏は、24歳から7歳まで5人の子供を持つ母親である。大学卒業後、一部上場企業の総合職として勤務したOL時代は、子育てと仕事の両立に大変苦労したという。その経験から、女性が活躍できる企業の体制づくりを強化してきた。

そのひとつが、出産・育児休暇、有給休暇の取得促進である。子供の入院や病気など、家庭で突発的なことが起こっても気兼ねなく休めるよう



に、直売所を中心にどの部署でも対応できるスタッフを育成し、休む人の仕事をカバーできる体制を作っている。この取り組みから結婚や出産で退社するスタッフが減少した。

女性のキャリア支援にも意欲的で、現在は社内5部門中3部門（農場のGPセンター、直売所の製造部門と販売部門）で女性社員が責任者として活躍中だ。販売部門の責任者はもともとパート従業員で、パートから社員の雇入れも積極的に行う。社内である程度の経験を積み、なおかつ子育てが一段落して、時間にゆとりを持つパート従業員に声をかけることが多く、これまでに約6名が社員に昇格している。

2. 女性活躍推進の取り組み

コーチングやポップ作り、SNSを利用した集客など、経営に関する研修会やセミナーの参加費を会社が負担し、社員のキャリア形成にも取り組んでいる。なかでも毎月1回定期的に行われているのが、都内の名門ホテルの製菓部門で腕を磨いた福岡在住のパティシエによる講習会。既存商品の製造法のおさらいから新商品開発までのレクチャーを受け、お菓子作りの専門知識を学んでいる。こうした取り組みから、熊本市商工会連合会主催のお菓子と加工品のコンテスト「肥後もっこすのうまかもん人気投票」には毎年参戦。2011年には看板商品となるスフレタイプのチーズケーキ「おっぱいチーズふるふる」が金賞受賞、2012年、2013年は「天使のふわふわたまご」が連続金賞、2017年に「青みかんのチーズタルト」が銀賞に輝くなど成果が表れている。

洋菓子の商品開発は、直売所の女性スタッフの意見が反映されており、毎月1回、ホールと販売担当のスタッフが報告書を上げ、会議の中で新商品のアイデアを出す。ひなたまここの店内には、しっとりフワフワの食感で大人気のロールケーキやシュークリームなどの約20種類の洋生菓

子や、自慢の卵を贅沢に使った焼菓子がずらりと並び、プリンだけでも3種類の商品が揃う。カントリー調でまとめたインテリアは、かわいらしい手描きのポップを配した暖かみのある雰囲気、女性らしいアイデアが光っていた。

3. 女性が働きやすい環境づくり

農場スタッフ22名中女性が16名と、生産部門でも半分以上を女性が占めている。同社では、生まれたばかりの雛を自社育成で採卵鶏に育て上げるといった手間ひまかけた生育法を採用し、機械では管理できない鳴き声や目視によって雛の状態を判断できる女性従業員の技が重宝されている。彼女たちが快適に働けるように、ウォシュレット付洋式トイレやスポットクーラー、汚れを自宅に持ち込まないための作業着用の洗濯機とシャワー室を増設した。

「仕事の意識が高い女性ほど無理をしてしまう」とみわ氏。「頑張りすぎかなというスタッフには『大丈夫?』と私から声をかけています。もし頑張りすぎていたなら他のスタッフに仕事を振り分けるなどして、仕事であまり無理をさせない配慮をしています」と話す。こうした同性同士だからできる心配りも、女性が働きやすい環境を作っている。

審査委員の声

“自分に代わって仕事をしてくれる人がいないので仕事を休めない”というのは、多くの職場で聞く話だろう。同社では、従業員が複数の仕事ができるように訓練することで、出産や育児などの長期休業だけではなく、自身や子供の病気などによる突発的な休暇にも対応できる職場をつくりあげた。簡単そうに見えるが、一時的には生産性が下がるため、意識的に取り組まなければ、なかなか進まないものだ。経営者の決断に敬意を表したい。